

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18320075  
 研究課題名（和文）：英語中間動詞構文の統合的分析から見た生成文法と認知言語学の接点  
 研究課題名（英文）：Where Generative Grammar and Cognitive Linguistics Meet:  
 A View from the English Middle  
 研究代表者：藤田 耕司(FUJITA KOJI)  
 京都大学・大学院人間・環境学研究科 教授  
 研究者番号：00173427

研究成果の概要：中間動詞構文は、狭義の統語論・意味論の相関のみならず事態認知の有り様を反映した言語現象でありながら、これまで理論横断的な包括的研究はあまり行われてこなかった。本研究では、現代理論言語学の二大潮流である生成文法と認知言語学の双方の利点を組み入れた統合的なアプローチを採ることによって、この多様な側面を持つ現象のより優れた分析方法を提案するとともに、生成文法、認知言語学それぞれの問題点と今後の展望を浮き彫りにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	7,400,000	2,220,000	9,620,000

研究分野：理論言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：中間動詞構文、インターフェイス、回帰的統語演算、用法基盤モデル、構文文法、言語習得

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、現代理論言語学の二大主要アプローチである生成文法と認知言語学の接点と発展的統合の可能性を、両者による英語の中間動詞構文(middle verb construction)の分析の比較検討とその融合を出発点にして探るものとするものである。この二つのアプローチ間には、言語能力の生得性や領域固有性をめぐって深い対立点も存在するが、本研究はむしろ、両者がともに多様な側面を持つ言語能力

の異なる部分にそれぞれの方法論で迫るものであることに注目し、具体的な言語現象の分析にあたっては、生成文法の形式論的分析方法と、認知言語学の用法基盤的・機能論的分析方法の双方をうまく噛み合わせなければ正しい結果は得られず、また言語科学全体の健全な進展も望めないという根本的な認識をその出発点としていた。

(2) 中間動詞構文（例 *This glass breaks*

easily.)は、対応する他動詞文や受動文(They can easily break this glass. This glass can be easily broken.)との比較において、その特異な統語的振る舞いや意味機能、動詞クラスに対する制限や付随する各制約、また通言語的差異などが大いに注目され、これまでの生成文法・認知言語学でも、本研究の代表者・分担者によるものを含め、多くの研究がなされてきたテーマの一つである。しかしそれらの先行研究はいずれも、生成文法または認知言語学の個別の枠組みの内部で分析を深めていくものであり、本研究のような両理論間の相互交流を重視する統合的視野に立つものは皆無であった。

(3) 本研究の生成文法研究班を構成する藤田と松本によるこれまでの研究では、ミニマリスト・プログラムのもとで徹底した統語的分析の可能性が追求されてきており、藤田・松本(2005)にまとめられるような成果をあげているが、その主要論点としては次のようなものがあつた。中間動詞構文の派生には、基底目的語の文主語位置への顕在的移動とともに、動詞の上位機能範疇への主要部移動が関与する。この目的語移動を可能にするには、動詞句内への外項の併合(Merge)を制限する必要があり、中間動詞構文形成を許すクラスの動詞とは、この外項の制限が可能な動詞に他ならない。この外項制限の結果、中間動詞構文の動詞句は事象構造として不完全となるため、中間動詞構文は事象解釈を持たず常に状態文として解釈され、個体レベル述語としての諸特性を持つことになる。以上の研究結果は、とりわけ中間動詞という特別な動詞クラスや、また中間動詞構文の生成にかかわる特別な統語操作が存在しないことを示した点で重要であり、本研究でもこの方向性をさらに追求することとした。と同時に、このような高度に構造的・形式的な分析によっては捉えきれない中間動詞構文の周辺の諸特性に対しては、認知言語学的・機能論的な視点が有効であるという洞察に基づき、生成文法の体系の中にこのような機能論的説明を取り込むことで、従来よりも優れた説明体系が確立できるという期待があつた。

(4) 一方、谷口と児玉による認知言語学研究班では、以前より二重目的語構文を中心とした言語習得の研究(児玉)、中間構文をはじめとする文法構文の認知言語学的・構文文法的モデル化(谷口)が進められていたが、とりわけ中間構文と構文文法・構文習得の関わりについては、以下の点が大きな研究課題であつた。第一に、中間構文の持つ文法的・意味的な特異性のため、構文文法的な定式化がいまだ十分に試みられていない点が挙げられる。また、構文の習得についても、中間構

文自体が広告などの特殊な使用域で用いられがちであることから、こどもが中間構文を実際に用いている事例をどのように検出し観察するかという実地的な問題があつた。

## 2. 研究の目的

本研究では、生成文法・認知言語学双方の分析を一層先鋭化させるとともに、建設的な意見交換や相互批判を通して互いのメリットを自らの分析に取り込むことでこれをさらに拡張し、生成文法・認知言語学の隔壁を撤廃する統合的枠組みを提示することを目標とした。より具体的には、生成文法側が提案した中間動詞構文の統語派生プロセスに対し、認知言語学側はより包括的な事態認知プロセスの有り様を考慮した視点から概念的裏付けを与え、と同時に、認知言語学側が用法基盤的立場から明らかにした中間動詞構文の諸機能に対し、生成文法側は構造・機能相関論の視点からそういった機能を表出させている言語のメカニズムの本質に迫ろうとした。中間動詞構文について提案されたこのような統合的アプローチは、それ以外のこれまで両陣営で個別に扱われ十分な説明が与えられてこなかった諸現象についても極めて有効であると期待することができ、本研究ではそれを検証する意味で他動性交替現象一般や使役構文、二重目的語構文などにも分析領域を拡充していくものとした。特に認知言語学研究班は、運用的側面からの分析を中心に行うものとし、「用法基盤モデル」(Usage-based Model)に基づく構文の成立に着目して、中間構文の習得過程を手がかりに、文法構文としての特性を明示することを目指した。とりわけ、用法基盤モデルに基づく言語習得研究の第一人者である M. Tomasello らが提唱する「動詞の島仮説」(Verb Island Hypothesis) に中間構文の獲得が適合するか否かを検証し、その結果に基づく構文文法的な定式化を最終的な目標とした。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の研究体制としては、生成文法を専門とする藤田・松本と、認知言語学を専門とする谷口・児玉の二つの研究班を組織した上で、藤田の統括のもと、各班内および両班間の活発な議論を基盤として上記目標の達成に努めることとした。

(2) 2006年度は、基本的には各個人ベースで研究を行った。特に生成文法班では、これまで行われてきた膨大な先行研究の徹底的な洗い出しと整理を行った。また、これまでに提唱済みの三層分裂動詞句構造をさらに精緻化し、中間動詞構文や関連諸構文の事象解釈やアスペクト解釈が事象項としての動詞句の内

部構造から自然に説明できることを示そうとした。加えて、統語論・意味論による中間構文の研究を検証し、英語、オランダ語、独語、仏語における非人称中間構文、付加詞中間構文も含めた包括的な中間構文の分析の可能性を検討することとした。

(3) 2007年度は前年度の研究成果を基盤として、生成文法研究班・認知言語学研究班の各班を単位とした研究活動を中心に進めるとともに、次年度への準備として両班間の交流・意見交換を活発に行うこととした。各個人が前年度に得た知見を相互に発信してそれぞれの研究にフィードバックし、自分析の改善、路線修正を行いながら、次年度に向けて統合的アプローチの構想を練り上げていった。

生成文法班では、三層分裂動詞句構造に基づく統語的アプローチをさらに推し進めるとともに、形式意味論や認知言語学の知見も活用しながら、これまでの分析では十分に説明し切れていなかった諸問題をあぶり出してその解決を図った。英語以外の言語における中間動詞構文との比較検討や他の関連構文との比較検討、またそれらの統一的分析の可能性も追求した。また、海外の生成文法学者・中間動詞研究専門家として米国マサチューセッツ大学のT. Roeper教授を日本に招聘し、講演会およびシンポジウムを開催して相互交流を行った。

また認知言語学研究班では、まず中間構文の習得に関連する先行研究を整理し、言語習得初期に発現する中間構文的発話のタイプを特定した。Pinker (1989)の枠組みに基づく語彙意味論の視点から、項構造交替に関与すると考えられている、動詞の意味素性 ([±motion],[±contact],[±effect]) に基づく分析の妥当性を、子どもの発話データを元に検証した。また、習得初期から自動詞的にも他動詞的にも用いられる可能性の高い動詞を選定した上で、こどもの発話のデータベースである CHILDES (MacWhinney 2000) を使用し、中間構文の発話事例を収集し、それらの発話の形式的・機能的特徴を発達段階に沿って考察した。

(4) 2008年度は、四名全員による共同研究の形態を基本として、前年度までの成果を総括集して生成文法・認知言語学双方の利点を取り込み、またそれぞれの不備を補完し合う理論横断的・統合的なアプローチを提示することとした。また、別途来日中であったメリランド大学のJ. Uriagereka教授を関西圏にも招聘して講演会を開催し、情報交換を行った他、四名全員が国内外の学会で講演やシンポジウム、ワークショップなどを行うこととなった。

#### 4. 研究成果

(1) 生成文法・認知言語学のいずれも、それ単独では中間動詞構文の説明理論として不十分であって両者の融合が必要である、というのが本研究の当初からの共通認識であったが、それを体現する、言語能力の根幹部と、そこに多面的に関与する認知プロセスという複眼的視点を持った理論の構築へ向けて、一定の成果をあげることができた。

(2) 生成文法研究班からの貢献としては、個々の構文を捨象した統語演算の普遍的特性とそれによって生じる句構造の性質から、中間動詞構文、さらに二重目的語構文など他の関連構文の意味特性を導出する可能性を示し、言語に内在するメカニズムの本質を明確にしたことがまず挙げられる。

藤田は、自説の三層分裂動詞句構造を支持する研究を、統語論や言語獲得、脳神経科学の文献に幅広く渉猟し、中間動詞構文を含めあらゆる構文形成の基盤である回帰的統語計算能力自体に対する生物言語学的考察を深めた。また、回帰的計算能力を中心とする言語の生物学的考察を推進し、言語進化・生物進化関連の学会での活動を行う中で、そのような汎用能力の一つの現れとしての中間動詞構文の位置づけを明確にし、その成果の一端を英国 York 大学で開催された学術会議『生物言語学：獲得と言語進化 2008 (BALE 2008)』において基調講演として報告した。さらに、2009年5月に米国マサチューセッツ大学で開催される回帰性に関する国際会議、同年7月に中国・北京で開催される第4回国際形式言語学会議でも、招待講演者として同様の報告を行うことが決定している。

松本は、非対格・非能格動詞分類から目的語交替を統合的に分析し、中間構文における統語的なアスペクトと総称性の分析を動詞の目的語交替に発展させた。また、米国言語学会(LSA)で中間構文における含意的動作主についての研究発表への議論に参加し、その結果、責任性(responsibility)の問題がまだ解決されていないこと、これまでの先行研究が提案してきた分析では不十分であるという認識を持つにいたった。その結果、中間動詞構文の意味特性である責任性に対して、三層分裂動詞句構造に基づく統語的説明を与えることに成功した。さらに、認知言語学でも議論されてきた中間構文の「責任性」について研究し、コーパスを用いてデータを確認しながら、中間構文の統語構造と意味の関係について、三層分裂 VP 構造を用いて精密な分析を行い、Primary Causer を用いた分析を提案し、先行研究における[+responsibility]という素性を用いた統語分析よりも、優れて説明的

であることを示した。また、語彙意味論に拠る Rappaport Hovav and Levin(2008)の二重目的語構文と与格構文の分類と分析を検討し、*give-type* の動詞は *caused possession* という event schema をもつだけで、*caused motion* という event schema をもたないという彼らの分析には、言語獲得の見地からも問題があることを指摘し、二重目的語動詞・与格動詞の中間構文についての Kaga (2007)の分析を三層分裂 VP 構造に適用する可能性を探った。

(3) 認知言語学研究班では、英語における中間構文の発現と獲得に関し、こどもの発話データをもとに実証的に考察した。その結果、中間構文的な用法は比較的早期から、主に否定文や疑問文の形で出現する点、英語の他動詞から非対格自動詞への交替の習得において中間構文的発話が一定の役割を担っている点を指摘した。用法基盤モデルに基づく構文文法で提唱されているような「動詞の島」からの一般化とは異なる過程を経て中間構文が成立する可能性を示唆し、構文習得の理論的側面においても新たな提案を示すに至った。

英語の中間構文の習得に関連する先行研究では、他動詞を自動詞的に用いる過剰な一般化による誤用例が、ある段階のこどもに多く見受けられること (Lord 1979)、こどもが発する中間構文の萌芽の事例は、自らが意図する行為が対象物により阻害され失敗した場合に、否定形の発話として生じる (Budwig, Stein and O'Brien 2001) ことが示唆されてきた。これらの観察をふまえ、本研究では、否定形で出現する中間構文的発話が実際には「他動詞→非対格自動詞」の交替の習得に寄与しており、他動的事態から動作主を分離させ、無生物を主体とする自動的事態を把握するための予備的役割を担うと仮説を立てた。

この仮説の検証のため、CHILDES データベースを使用し、習得初期に発現する動詞のひとつである *open* の無生物主語の自動詞的用法を観察した。観察対象はアメリカ英語およびイギリス英語を母語とするこどもとその保護者である大人の発話とした。

観察の結果、以下の表に示すように、アメリカ英語・イギリス英語ともに、こどもの発話に肯定形が占める割合は低く(26%)、特にアメリカ英語では疑問形 (Does it open?) が顕著に多い(46%)。大人の発話も同様に肯定形の発話は少なく(16%)、特に否定形 (It doesn't open.)が大多数を占める(63%) という傾向が明らかになった。

	疑問形	否定形	肯定形
AmE	51	19	19
BrE	0	12	10
総計	51 (46%)	31 (28%)	29 (26%)

(こどもの発話)

	疑問形	否定形	肯定形
AmE	18	56	11
BrE	11	34	12
総計	29 (21%)	90 (63%)	23 (16%)

(大人の発話)

このデータは、習得初期における中間構文的発話の典型的事例は肯定形ではないという明白な事実を示しており、Budwig らの指摘にも合致している。従って、個別の動詞ごとに習得された項構造が後に一般化されて構文となるという「動詞の島仮説」は中間構文に関しては支持されず、この構文が二重目的語構文など他の英語構文とは異なるプロセスによって成立するという可能性が示唆される。また、こどもの疑問形発話および大人の否定形発話の頻度の高さは、それぞれが果たす機能に由来するものと考えられる。前者は、こども自身による行為の遂行の許可を大人に尋ね、後者はこどもの行為の遂行を禁止・阻止するという機能であり、これらが実際の大人とこどもの会話場面において頻繁に発現するのは理に適う。中間構文の発現と習得に関して機能的側面からの説明が有効であることを示すものである。

なお、観察した事例のうち、中間構文ではなく純粋な非対格自動詞の用法であると判断されるものはごく少数であり、大多数の事例は「動作主(こども)による行為」の存在を含意するものであった。このことは、非対格自動詞以前に中間動詞的用法が獲得されており、他動詞から非対格自動詞への交替の橋渡しをするという本研究の仮説を裏付けるものである。この交替が過剰に一般化され、同形の非対格自動詞をもたない他動詞を自動詞として用いる誤用が生じると想定されるが、自動的事態の適切な言語化の習得には、受け身形などその他のオプションの習得も関連していると考えられ、その詳細な検討は今後の研究課題とした。

最終的には、中間構文の獲得に関して、Goldberg 流の構文文法的な分析を行うことは難しいという結論を得た。中間構文は、特定の語彙項目に依存する構文として、トークン頻度が高い文法構文であるとは言え、「構文の島」(Constructional Island)を形成するほどのタイプ頻度が認められない。このような言語

事実に基づくと、構文の習得プロセスについて提唱された「動詞の島仮説」の妥当性について、今後更なる検討が必要となる。

(4) 生成文法班と認知言語学班の成果を総括すると、次のようになるであろう。まず、中間構文について、従来から認知言語学でも議論されてきた責任性について、生成文法班が提案する三層分裂動詞句構造を用いることにより、他の統語的分析よりも説明的な分析が可能であることが示された。この研究の成果に、今回の認知言語学班による、こどもの発話において、純粋な非対格自動詞の用法よりも「動作主(こども)による行為」の存在を含意するものが多いという重要な知見を組み合わせると、Primary Causer の解釈をもつことのできる目的語のみが中間構文の主語位置に移動できるという責任性の条件について、Primary Causer は動作主に近い機能をもつからという裏付けを与えることができる。

また、認知言語学班の、習得初期における中間構文的発話の典型的事例は肯定形ではないという観察は、中間構文が副詞、法助動詞、否定要素等と共に起しなければならないのは、三層分裂動詞句構造の中の一つの層に対して他の要素が何らかの認可を行うことにより中間構文としての解釈が成立するためである、という生成文法班の分析の方向性と相容れるものである。

一方、二重目的語構文における語彙意味論的分析と統語論的分析の比較における生成文法班の研究は、今後の認知言語学班の二重目的語構文における研究にも応用可能なものと考えられる。

次に、生成文法班が提案する三層分裂動詞句構造は、中間構文ばかりでなく、能格文、非対格自動詞構文、非能格自動詞構文、さらには二重目的語構文をも統一的に説明することを可能にしたが、中間構文が他動詞から非対格自動詞への交替の橋渡しであるという認知言語学班の主張は、この三層分裂動詞句構造の多角的な考察を通して、さらに検討を進めることができると思われる。と同時に、この中間構文の習得に関する研究を、三層分裂動詞句構造、さらには言語発達・言語進化の文脈における言語の回帰性自体についての研究にも応用することができる。

(5) 今回のプロジェクトにより、今後も生成文法と認知言語学の双方向フィードバックにより、中間構文はもとより、他動性交替を含む様々な構文から、最終的には言語の本質・発達・進化を巡る包括的研究の発展の方向付けが可能になったと言える

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

Fujita, Koji, Dimensions of Language Evolution: A View from Generative Biolinguistics, *Studies in Language Sciences*, 8, 45-58, 2009, 査読有

藤田耕司, Evo-Devo -- 生成生物言語学の中心命題, 月刊言語, 37, 24-29, 2008, 査読無

藤田耕司, 海外新刊紹介 Cedric Boeckx (2006): *Linguistic Minimalism: Origins, Concepts, Methods, and Aims*, 月刊言語, 37, 114, 2008, 査読無

藤田耕司, 回帰性から見える文法の発達と進化, 月刊言語, 36, 16-24, 2007, 査読無

藤田耕司, 生成文法とヒト(およびトリ)における回帰的能力, 生物科学, 59, 85-94, 2007, 査読有

藤田耕司, 変化を伴う由来 - 生成文法による言語の普遍と多様の解説, *Viva Origino*, 35, 136-147, 2007, 査読有

Fujita, Koji, Facing the Logical Problem of Language Evolution, *English Linguistics*, 24, 78-108, 2007, 査読有

松本マスミ, <生物言語学会(BALE)>報告, 月刊言語, 37, 94-95, 2008, 査読無

Matsumoto, Masumi, Towards Syntactic Account of Responsibility in the Middle Construction, 大阪教育大学英文学会誌, 53, 127-134, 2008, 査読無

松本マスミ, 英語の動詞分類と目的語交替, 大阪教育大学紀要第1部門人文科学, 56, 1-11, 2007, 査読無

谷口一美, 中間構文の習得からみた構文文法的再考, 日本認知言語学会論文集, 9, 2009 予定, 査読有

Taniguchi, Kazumi, Review: Adele E. Goldberg, *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, *Studies in English Literature* (English number) 49, 193-199, 2008, 査読有

児玉一宏, 海外新刊紹介 Steven Pinker (2007): *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human Nature*, 月刊言語, 37, 121, 2008, 査読無

児玉一宏, 言語習得と構文形成, 月刊言語, 36, 68-76, 2007, 査読無

児玉一宏, 書評: 認知文法の新展開, 英語青年 151, 699, 2006, 査読無

[学会発表](計6件)

Fujita, Koji, Recursion, Modularity and the Evo-Devo of Language, Biolinguistics:

Acquisition and Language Evolution (BALE) 2008, 2008.07.04, University of York, UK

Fujita, Koji, Where Do Verbs Come from? Part 1: Anti-Lexicalism for the Study of the Origins and Evolution of Language, Kyoto Workshop 2007: Generative Grammar and Beyond, 2007.06.11., 京都大学

松本マスミ, 反語彙主義による動詞統語論 (Syntax of Verbs and Anti-Lexicalism), 日本英語学会, 2008.11.16., 筑波大学

Matsumoto, Masumi, Where Do Verbs Com from? Part2: Syntax-Semantics Interface -- A Case Study, Kyoto Workshop 2007: Generative Grammar and Beyond, 2007.06.11., 京都大学

谷口一美, 中間構文の習得からみた構文文法的再考, 日本認知言語学会, 2008.09.14, 名古屋大学

児玉一宏, 構文の発現と語用論的視点 英語の中間動詞構文と二重目的語構文の分析を中心に, 日本語用論学会, 2008.12.21., 松山大学

(2) 研究分担者

松本 マスミ(MATSUMOTO MASUMI)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号: 10209653

谷口 一美(TANIGUCHI KAZUMI)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80293992

児玉 一宏(KODAMA KAZUHIRO)  
京都教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 40340450

〔図書〕(計9件)

藤田耕司(分担執筆), 池内正幸(編)『言語と進化・変化』, 2009 予定, 朝倉書店

藤田耕司(分担執筆), 乾敏郎 他(編)『よくわかる認知科学』, 2009 予定, ミネルヴァ書房

谷口一美(分担執筆), 山梨正明 他(編)『認知言語学論考 No.6』, 95-123, 2007, ひつじ書房

谷口一美(分担執筆), 菅野盾樹(編)『レトリック論を学ぶ人のために』54-77, 2007, 世界思想社

谷口一美(分担執筆), 河上誓作・谷口一美(編)『ことばと視点』58-73, 2007, 英宝社

谷口一美, 『学びのエクササイズ: 認知言語学』, 総 129 頁, 2007, ひつじ書房

児玉一宏(分担執筆), 山梨正明(編)『言語習得と用法基盤モデル』, 2009 予定, 研究社

児玉一宏(分担執筆), 児玉一宏 他(編)『言葉と認知のメカニズム』, 2008, 総 665 頁, ひつじ書房

児玉一宏(分担執筆), 中島平三(編)『言語学の領域(I)』, 2009, 総 273 頁, 朝倉書店

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 耕司(FUJITA KOJI)  
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授  
研究者番号: 00173427